

20周年記念特集号

岩倉使節団の世界的意義
地球時代と日本の未来像

- 12/2(金) テーマ: 岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたか〜その光と影
基調講演: 芳賀 徹「日本近代史における岩倉使節団の意味」
講師: ウィリアム・スティール、五百旗頭真、マーティン・コルカト
- 12/3(土) テーマ: 日本近代 150 年を考える〜“もう一つの道”を問う
基調講演: 保阪 正康「日本近代 150 年をどう見るか」
講師: 瀧井一博、成田龍一、中島岳志、楠綾子
- 12/4(日) テーマ: 志民の創る 地球時代の日本の未来像
基調講演: 五百旗頭 真「世界の中の日本の役割」
講師: 山折哲雄、橋本俊昭、福川伸次、近藤誠一
アレックス・カー、鎌谷浩介、星野恵美子、川口加奈、堀内正弘

米欧亜回覧

第84号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会



会場(学術総合センター)



開会挨拶(趣旨説明)
泉三郎代表

当日設立二十周年記念「グランドシンポジウム」は、東芝国際交流財団、一般社団法人東京倶楽部の支援のもと、二〇一六年十二月二・三・四の三日間にわたり、東京千代田区の一ツ橋にある学術総合センターで、連日素晴らしい好天に恵まれ、多数の参加者を得て盛大に開催された。初日、二日目は二百名収容

設立二十周年記念
グランドシンポジウム・フォトドキュメント



12月2日(第1日) 芳賀徹氏の基調講演(中会議室3・4)



閉会の挨拶
実行委員長
塚本弘氏



12月4日(第3日) 一橋講堂 壇上は山折哲雄氏

の会議室で、三日目は四百名収容の大講堂で、各テーマにしたがい、講演・発表・質疑応答・パネルディスカッションが繰り広げられ、全国から集まった聴衆は熱心に視聴し真摯な議論が展開された。本号は「フォト・ドキュメント」(撮影・多田直彦氏、近藤義彦氏)の形で八頁にわたりその概要をお伝えします。なお、詳しい内容については別に報告書を作成し、ホームページ並びに出版物においてお知らせする予定です。

20周年記念特集号

第1日 12月2日(金) 岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたか～その光と影

10:00 開会挨拶 泉三郎(会代表)

10:15 基調講演 芳賀徹(東京大学名誉教授) 「日本近代史における岩倉使節団の意味」

11:00 講演 ウィリアム・スティール(国際基督教大学名誉教授) 「岩倉使節団は何を見たか～久米邦武を中心に」、泉三郎「岩倉使節団の光と影～大使副使を中心に」、小野博正(会員)「岩倉使節団関連群像列伝(163名の小伝)から見えてきたもの」

13:20 会員発表「知られざる岩倉使節団の群像」各40分

・A会場 安場保和、団琢磨、金子堅太郎、山田顕義、林重、長与専吉、井上毅

・B会場 新島襄、田中不二麿、渡辺洪基、女子留學生、吉原重俊、島山義成、田中光顕

17:20 総括パネルディスカッション

モデレーター: 五百旗頭薫(東京大学教授)

パネリスト: 芳賀徹、ウィリアム・スティール、マーティン・コルカット(プリンストン大学名誉教授)、泉三郎、小野博正、村井智恵(会員) [19:00 終了]



満席の中会議室3・4



泉三郎代表の開会挨拶 (趣旨説明)



芳賀徹氏 東京大学名誉教授

基調講演

日本近代史における岩倉使節団の意味



コーディネーター 岩崎洋三氏

初日は、「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたのかーその光と影」について、使節団の群像の事跡を追いつながらの報告と議論がなされた。基調講演は芳賀徹氏、講演はウィリアム・スティール氏と会から泉と小野が報告し、午後の部では二会場に分かれ、これまで余り知られていなかった団員や随行留學生十四名について会員の研究成果が披露された。参加者は明治人の多方面にわたる多彩な活躍ぶりに聞き入った。また、パネルディスカッションでは、気鋭の政治学者五百旗頭薫氏の進行により、興味



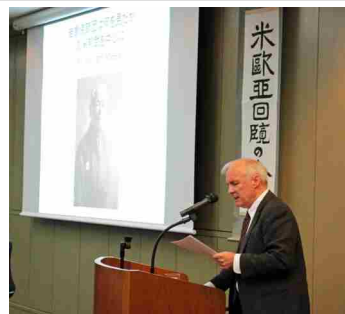
小野博正氏 会員

講演 岩倉使節団関連群像列伝からみえてきたもの



泉三郎氏 会代表

講演 岩倉使節団の光と影ー大使副使を中心に



ウィリアム・スティール氏 国際基督教大学名誉教授

第一セッション

講演 岩倉使節団は何を見たか

ある内容の意見発表と交換が行われた。

第二セッション
会員発表

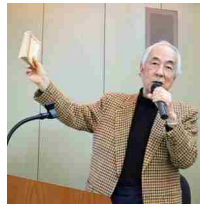
A会場



③吹田尚一氏



②桑名正行氏



①芳野健二氏

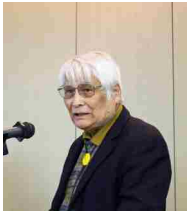


司会
小野博正氏

- ①安場保和(熊本)「地方行政のキーマン」
- ②団琢磨(福岡)「鉾山技師から三井財閥の総帥へ」
- ③金子堅太郎(福岡)「広報外交の先頭に立つ」
- ④山田顕義(山口)「小ナポレオン 兵から法へ」
- ⑤林董(幕臣)「箱館戦争から外交の主役へ」
- ⑥長与専斎(長崎)「近代医療への道」
- ⑦井上毅(熊本)「明治国家のグランドデザイナー」



⑦大久保啓次郎氏



⑥西井易穂氏



⑤岩崎洋三氏



④西脇美都絵氏

B会場

- ⑧新島襄(安中)「近代化は教育から」
- ⑨田中不二磨(尾張)「学制から教育令へ」
- ⑩渡辺洪基(越前)「明治のマルチプランナー」
- ⑪女子留学生(幕臣の子ら)「明治女子英語教育のパイオニア」
- ⑫吉原重俊(薩摩)「初代日銀総裁への道」
- ⑬畠山義成(薩摩)「もう一人の回覧実記作者」
- ⑭田中光顕(高知)「明治国家の黒幕の巨魁」



⑩赤間純一氏



⑨大森東亜氏



⑧多田直彦氏



司会
植木園子氏



⑭小野寺満憲氏



⑬村井智恵氏



⑫吉原重和氏



⑪畠山朔男氏



芳賀徹氏もパネリストとして参加



パネリスト(左から)
マーティン・コルカット氏
ウィリアム・スティール氏
泉三郎氏
小野博正氏
村井智恵氏

第三セッション
総括パネルディスカッション



モデレーター
五百旗頭薫氏

***会場からの声**

・「知られざる岩倉使節団の群像」の発表がよかった。それぞれの人物へのアプローチの仕方がそれぞれに个性的で、一般学会と異なる良質なサロン風で、この会の性格をよく表していると思った。

・使節団の「光と影」、いろんな捉え方があり大変勉強になった。光と感じることは、政府首脳間の認識が統一されたこと、もし使節団が行かなかつたら、政府内の議論が分裂し収まらなかったであろうと思った。

・「使節団の群像」を聞いて感じたことは、幼少の頃から優れた指導者のもと徹底した教育を受けて人格を形成し「人」となっていくことである。いまの日本の教育環境がともうらぶれてみえる。

・「回覧実記」を全巻読むことを決意、購入した。八千円也。

20周年記念特集号

第2日 12月3日(土) 日本近代150年を考える～“もう一つの道”を問う

10:00 開会挨拶 山田哲司(会長)

10:10 基調講演 保阪正康(ノゾクゾク作家、日本近現代史研究者)

「日本近代150年をどう見るか」

10:50 「近代国家建設の理念と現実」

報告者: 吹田尚一(会員)、持田鋼一郎(会員)

コメンテーター: 瀧井一博(国際日本文化研究センター教授)、成田龍一(日本女子大学教授)

13:30 「戦後国家再建の軌跡と展望」

報告者: 井出亜夫(会長)、森本淳之(会長)

コメンテーター: 中島岳志(東京工業大学教授)、楠綾子(国際日本文化研究センター准教授)

15:20 総括パネルディスカッション

モデレーター: 泉三郎(会代表)

パネリスト: 保阪正康、瀧井一博、成田龍一、楠綾子、山田哲司、半澤健市(会員)

18:30 レセプション 演奏: F-Clare 弦楽合奏団 【20:30 終了】



山田哲司氏 (モデレーター)

開会挨拶 (趣旨説明)

二日目は、「日本の近代百五十年を考える」～“もう一つの道”を問う～をテーマに、基調講演は保阪正康氏、続いて会員四名(吹田、持田、井出、森本)による研究発表と、瀧井一博、成田龍一、楠綾子の各氏よりのコメントがあり、会員の山田、半澤がモデレーターとなり議論が盛り上がった。



保阪正康氏

基調講演

日本近代百五十年をどう見るか

第三セッションでは、泉がモデレーターとなり、六名がパネリストとなりディスカッションが行われた。会場からの質問や発言も多く会場には熱気がこもった。ただ、テーマが大きく時間が不足し十分な議論ができなかったのは惜しまれる。尚、中島岳志氏が都合で欠席されたのでパネルに保阪氏が参加された。



コメンテーター 瀧井一博氏



コメンテーター 成田龍一氏



持田鋼一郎氏 (会員)



吹田尚一氏 (会員)

第一セッション 報告

報告 建国から発展、そして大戦の途へ



質疑応答 (左から) 成田龍一氏、瀧井一博氏、吹田尚一氏、持田鋼一郎氏

第二セッション

戦後国家再建の軌跡と展望



モデレーター
半澤健市氏

報告
新しい公共と企業の社会的責任



井出亜夫氏(会員)

報告
日本資本主義の発展と低迷



森本淳之氏(会員)



質問する
会場の参加者



質疑応答(左から)
楠綾子氏
保阪正康氏
森本淳之氏、
井出亜夫氏



コメンテーター
楠綾子氏

第三セッション
総括パネルディスカッション

パネリスト
(左から)
瀧井一博氏
成田龍一氏
楠綾子氏
山田哲司氏
半澤健市氏



右) モデレーターの泉三郎氏
左) パネリスト参加の保坂正康氏



会場の五百旗頭真氏も議論に参加



*会場からの声

・保阪先生の日本近代百五十年「起承転結」説、戦前八十年の「軍事」と戦後七十年の「非軍事」の解析は明快だった。

・テーマがテーマだけに云い放しになってしまったのは残念ですが、多くの論点がちりばめられたという意味では良いシンポジウムだった。

・テーマとは見当違いの発言や脱線も少なくなかったけど、それにこだわらなければとても面白かった。

・基調講演、セッション講演、パネルディスカッション等、講師人選など多彩で学芸発表とは異なり大変面白かった。知人にこのシンポジウムのプログラムを見せたら、是非参加したかったといっていた。

・サブテーマが「もう一つの道」を問う」だったが、それが何なのか、どこにあるのか、どのパネリストの発言からも受け取れなかったのは心残りである。
・日本の近代を、長い歴史の中でとらえることが出来、大変充実した一日を過ごすことができた。

20周年記念特集号

第3日 12月4日(日) 志民の創る 地球時代の日本の未来像

10:00 開会挨拶 泉三郎(会代表)

10:10 基調講演 五百旗頭真(熊本県立大学理事長)
「世界中の日本の役割」

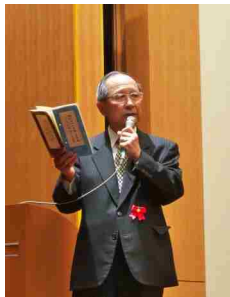
10:50 講演《地球時代の日本の立ち位置を問う》
山折哲雄(国際日本文化研究センター名誉教授)「日本の価値観」、橋木俊詔(京都女子大学客員教授)「日本資本主義の功罪」、福川伸次(東洋大学理事長)「日本が目指す社会像～大平構想を踏まえて」

13:40 講演《自然と伝統と文明が響き合う社会へ》
近藤誠一(地球システム・倫理学会会長、元文化庁長官)「美味し国・ニッポン」、アレックス・カー(観光立国、美しい景観の提唱・実践者、東洋文化研究者)「美しき日本を求めて」、薄谷浩介(日本総合研究所調査部主席研究員)

「和の国・しなやかな日本列島」、星野恵美子(那須野々原土地改良区連合会理事)「究極の生き残り作戦～循環システムの構築」、川口加奈(NPO 法人Homedoor 代表)「ホームレス状態を生み出さない日本へ」、梶内正弘(多摩美術大学教授、コミュニティスペース「シェア楽院」主宰)「日本をほぐす」

16:50 総括パネルディスカッション「岩倉使節団の世界史的意義と地球時代の日本の未来像」
モデレーター: 泉三郎(会代表)
パネリスト: 芳賀徹、保阪正康、五百旗頭真、近藤誠一、アレックス・カー、橋木俊詔、塚本弘(会理事)

18:55 閉会 塚本弘(会理事、実行委員長) 【19:00 終了】



司会 近藤義彦氏

三日目は会場を大講堂に移し、「地球時代の日本の未来像」をテーマで行われた。基調講演は五百旗頭真氏の「世界の中の日本の役割」。続いて山折哲雄氏が思想的な面から、橋木俊詔氏が経済学者の視点から、福川伸次氏が政治行政面から話がいった。

第二セッションでは、「日本の未来像―自然・伝統・文明の交響」をテーマに近藤誠一氏、薄谷浩介氏、アレックス・カー氏の講演があり、「志民の創る」を代表して、「自然循環エネルギーの開発」



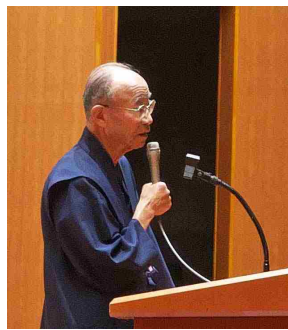
五百旗頭真氏
熊本県立大学理事長

基調講演
世界の中の日本の役割



橋木俊詔氏
京都女子大学客員教授

講演
日本資本主義の功罪



山折哲雄氏
国際日本文化研究センター名誉教授

講演
日本の価値観

第一セッション

「ホームレスをなくす運動」、「日本をほぐす活動」、などまさに「志の民」ならではの体験的レポートがあり深い感動を呼んだ。

最後は三日間の総括ということでもあり、泉代表がモデレーターとなり、パネリストに一日目から芳賀徹氏、二日目から保阪正康氏も参加願



質疑応答
司会は塚本弘氏



福川伸次氏 東洋大学理事長

講演
日本が目指す社会像
―大平構想を踏まえて



実行委員長
コーディネーター
塚本弘氏(会理事)

に加えて、本会実行委員長
の塚本氏も参加して行われ
た。

第二セッション
講演

志民たち(NPO)の実践活動

究極の生き残り作戦—循環システムの構築



星野恵美子氏

那須野ヶ原土地改良区連合参与

ホームレス状態を生み出さない日本へ



川口加奈氏

NPO法人Homedoor代表

日本をほぐす—場づくりからの価値創造



堀内正弘氏

多摩美術大学教授、コミュニティ
スペース シェア奥沢主催



モデレーター
泉三郎氏

泉三郎氏 (会代表)



近藤誠一氏

地球システム・倫理学会会長
元文化庁長官

講演
美味し国・ニッポン



コーディネーター
島山朔男氏



藻谷浩介氏

日本総合研究所調査部
主任研究員

講演
和の国・しなやかな日本列島



アレックス・カー氏
観光立国、美しい景観の提唱者・実践者、東洋文化研究者

講演
美しき日本を求めて

第三セッション
総括パネルディスカッション



(左から) 泉三郎氏、そしてパネリストは以下の6名
芳賀徹氏、保坂正康氏、近藤誠一氏、アレックス・カー氏、
橘木俊詔氏、塚本弘氏

*会場からの声

・山折先生のお話、日本人の三層の価値観、歴史と風土に育まれた美意識、平安と江戸の二度も長期の平和をもたらししたのは政治権力と宗教的権威の二元制とする見方、いずれも新鮮で興味深かった。

・山折先生、福川先生の話は、感銘深く聞きました。星野さん、川口さんは地域で着実に活動を続けていることに感動した。単なる評論家的な話は新味も深さもなく退屈である。

・保坂さんの「アネクトド有りや無しや」も面白い指摘で、カーさんの「車窓の景色は最悪」にも共鳴した。

・芳賀先生の「未来像を語るより歴史を知る事の方が大事」との説は、ちよつとはぐらかされたように感じたが、「振り返れば未来の選択肢がみえてくる」という橘木さんの言葉で、重く受け止めるべきだと思ひ直した。

・溢れんばかりの知識と情報を頂いた今回のシンポジウム、感銘を受け「米欧亜回覧の会」に底力ある日本を見た。

20周年記念特集号

レセプション

二日目の夜にはパネルディスカッション終了直後の会議室を急ぎ模様替えして華やかなレセプション会場を仕立て、中央テーブルには見事な花と料理が並び、弦楽合奏団の優雅な演奏が流れ、参会者たちはワイングラスを片手になごやかな懇親の時を過ごした。



挨拶
理事の石垣禎信氏



乾杯 五百旗頭真氏

演奏：i-Café 弦楽合奏団（会員とその仲間たち）



井本由紀 (vl) 植木潤 会員 (vl)
白田慧太郎 (vl) 柳沼遙 (vl)
田中美衣 (vla)
キーボードは植木園子 会員



スピーチする
五百旗頭薫氏



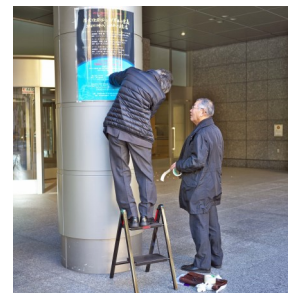
スピーチする
ウィリアムスティール氏



機器の操作や記録は吉原重和氏
中心のチームが担当



大勢の参加者を受付



学術総合センター入口に
ポスターを掲示

裏方大活躍

***会場からの声**

- ・是非この会を我々「ジジイ集団」から、これからの時代を担う「若い世代」が興味をもつような会にするよう努力していただきたいと思う。
- ・志民による実践活動はとても良い企画だと思う。川口加奈さんのような若い方がいることの感動。日本もまだ大丈夫だと思えて嬉しい。
- ・「文明の災禍が惹起しつつある」ということを実感できる話だった。考える時間を与えてくれ、素晴らしき示唆が沢山あった。
- ・「住んでよし、訪れてよしの地域づくり」を考える上で、壮大な過去と現在から未来を考察するよい機会となった。
- ・歴史が未来につながることを実感させるシンポジウムだった。大きな問題から身近な問題まで幅広く取りあげたテーマの選定も大変よかった。一点、この活動にもっと若者が参加しやすいように、工夫が必要かと思う。
- ・時代が変わろうとする時代の開催だけに将来の日本を考える絶好のタイミングであった。



ニューマーケットの建物(実記)

実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@icom.home.ne.jp



が開催された。

■第二百十回

一月二十七日開催、参加者十一名。21,22巻イギリス総説・ロンドン総説。

本年は、久米実記の英国編を一年間かけて読む。久米はアメリカを発つときに正式に使節団の記録係に任命されたので、その最初の総説は、観察・描写がより緻密となり精彩を放つ。

その文章を、一緒に読みながら当時の英国を振りかえ

十月二十八日の第二百八回は、多田直彦氏のグラウンドシンポジウム事前発表(20章ポスト市の記)が行われ、十二月二十三日の第二百九回は新宿「さがみ」で忘年会

る。使節団が訪れた時期のヴィクトリア女王は、夫君アルバート公を亡くして十年間の服喪中で、産業革命を謳歌し、且つ地球上の領土と人口の四分の一を支配する最盛期にありながら、首相のグラッドストーンが王権を抑え、議会を中心とする平和外交・自由主義改革を進めていて、女王と対立していた。そのことが、のちに天皇主権で国を纏めようとする使節団の英国式立憲君主主義の採用を躊躇わせ、ドイツの皇帝大権で、臣下が皇帝を輔弼するスタイルへの傾斜につながるようになる。

イギリスの繁栄と絶対主義国家は、スペイン艦隊を撃破して七つの海を制覇したエリザベス一世時代に確立した。スペインの銀を運ぶ船を、フランシス・ドレークなど私掠・海賊船に襲わせて強奪し、ジョン・ホーキンス(奴隷王)によるアフリカの奴隷を西インド諸島に送り込み、砂糖・コーヒールのプランテーションに従事させ、インド・豪州からの綿花を、国内加工して、植民地や諸外国に売りつける、いわゆる三角貿易で国富を築いた。ヴィクトリア時代になっても、中国からの生糸、茶葉、陶磁器交易に必要な銀を確保するために、ベ

ンガルでアヘンを栽培させて

中国にアヘンを広める等の負の歴史を振り返った。アヘン戦争後英清で結ばれた南京条約が、そのまま日米通商(不平等)条約の手本となった。

日清戦争で日本は、歳入の二倍以上にあたる二億三千万両の賠償金を得て、ポンド建て英国で受け取った。その金の六十二%が陸海軍の軍拡に使われて、日露戦争への道を開くことになった。イギリスは今も昔も、貴族が幅を利かせる世界で、使節団訪英の時期も、直前に選挙法改正があったとはいえ、貴族と産業資本家中心で、まだ参政権は人口のたった九%に過ぎなかった。労働者の平均寿命は二十九歳。

最後に、参加者全員で『イギリス人とは何か』を定義し合った。貴族主義、覇権主義、世界のルールを決めたがる近代西洋文明のルーツ、古きを尊ぶが新しがり屋、サイクス・ピコ協定で各国の国境を勝手に決めた世界のトラブルメーカーなど多彩な顔が見えた。BREXITもその一つか? (小野博正)

■第二百十一回

二月二十四日開催、参加者十一名。23,24,25章ロンドン編。

使節団は博物館を訪れ、一八五一年以降の万国博の歴史を辿り、フランスの声価に比

しイギリスの拙劣とその改善を語り、動物園を訪ね、まだ日本語の定着していない珍獣に戸惑っている。ジラフは「長首の小鹿」、河馬は「江豚」、カンガルは「カンクロー」(勘九郎?)など。議会で上院下院のシステムやグラッドストーン、デイズレーリーの二大政党を語り、ヴィクトリア号上ではネルソンを偲び、英国の国防は海軍にありと。そして「欧州の繁栄先行はわずか四十年に過ぎない!」と持論を強調し、日本のキャッチアップは可であるとの気概を示している。

(一)さてこの日の第二部は英国総論の補足として「大いなる帝国、大いなる欺瞞」と題して、十七世紀以降の帝国形成の歴史(奴隷貿易やアヘン取引など、かなり危うい)と、二十世紀初頭の「三枚舌外交」を振り返ってみた。「アラビアのロレンス」や「アラビアの女王」(ガートルートベル伝)の映画などにも見られるように、昨今の世界問題、シリアやイスラエルなどが全てこの頃の英国の国家的利益(一・フセイン・マクマフオン協定、二・サイクス・ピコ条約、三・バルフォア宣言)に起因していることに改めて驚く。また「庇を貸して母屋を取られる」という例えがぴったりの戦後のイス

ラエル建国史がアメリカ建国史(先住民駆逐)の歴史にピタリと当てはまる様を図解してみた。アメリカがなぜイスラエルに強いことが言えないかがわかる。

(二)「英国人の形成、英語の成立」を分析し、先行のケルト・ゲルマン的要素と、後続のラテン・ノルマン的要素の混成であることを知った。ちやうど日本が土着やまとの要素と、大陸漢語的要素の混合であるように。

第三部は「漱石のロンドン、鴉外のベルリン、荷風のパリ」と題して、明治の青年(のちの文豪)が何を見、何を考えたかを振り返ってみる。(芳野健二)

■第二十八回

十月月十二日開催。

①07:30「京都天皇に謁見」

1868年3月23日、明治天皇に謁見予定の英国公使ハリー・パーク

の襲撃事件の経緯と、新政府・朝廷側が

誠意ある対応で切り抜け、結果として新政府の開国和親の決意を实地において証明する

かたちで終わった。

(斎藤 恵子)

(Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan

輪読会) ⇒ 英書輪読会

担当幹事 岩崎洋三

Tel 080-7959-4332

iwasakiy21116@gmail.com



②Ch. 31 「江戸帰着、および大坂における公使の信任状奉呈」

官軍の先鋒が江戸近郊に達し、慶喜は天皇に服従の指示をし、勝は西郷との談判では慶喜への寛大な措置求め、パークスにも新政府への影響力行使を要請していた。耶蘇教禁止令復活(五榜の掲示)へのパークスがの反駁と大隈重信の対応など。

(岩崎 洋三)

■第二十九回

十一月十六日開催、Ch. 32 雑多な事件、天皇の江戸行幸

一八六八年正月、鳥羽伏見の戦いに勝利した薩長官軍は、江戸城を開城させ無血占拠した。更に上野に立てこもった徳川の強硬派を大村益次郎の指揮で一日で撃破し、更に東北会津方面の戦線に照準を合わせていった。

一方水戸藩の政争が激化して天狗党の悲劇なども起きた。アーネスト・サトウはこの大きく転換する戦況の中で明治新政府の中心メンバーの絶大な信頼と人脈から正確な情報を入手した確な行動をとることができた。(水谷 剛)

■第三十回

十二月二十一日開催、Ch. 33 「若松の占領と天皇の江戸行幸」、Ch. 34 「榎本、脱走した

徳川の艦船をもつて江戸を攻略」

前月に榎本艦隊の品川脱走があり、翌日には官軍の会津若松城総進撃するという慌ただしい時期にも関わらず、サトウは幕府・官軍双方の要人と緊密に接し、横浜競馬や、吉原に同行したりと余裕があるのには驚かされる。

(岩崎 洋三)

■第三十一回

一月十八日開催、Ch. 35 「1869年、江戸で天王に謁見」、Ch. 36 (最終章) 「東京における最後の滞在、故国へ出発」

一八六九年(明治二年)一月五日、サトウら英国公使館一行は天皇に謁見。賜暇帰国を前に、サトウは岩倉具視、三条実美、東久世通禧、大久保利通、木戸孝允、勝海舟ら、明治政府要人に面会し別れの挨拶。同年一月から二月にかけて、政府の最大懸案は榎本武揚を首魁とする徳川反軍の動向だった。明治二年二月二十四日、サトウは横浜港からオタワ号に乗り帰国の途に。(榎原 智子)

二〇一四年四月から毎月続けて来た「Sir Ernest SatowのA Diplomat in Japan」の輪読会は、無事読了した。二月からは、英書輪読会として「The Complete Journal of Townsend Harris, First Amer

Ican Consul and Minister」を輪読している。当会は二〇〇三年一月に当時出た「米欧回覧実記」の英訳版を読むことからスタートしたが、これが三冊目のテキストとなる。

原則、毎月第三水曜日の午後二時から日比谷図書文化館四階のセミナールームで開催している。

■第一回

二月十五日開催、Preface & Introduction

ハリスの日記は一八五五年五月二十一日のペナンに始まり、一八五八年六月九日の断片的な記事をもって最後としている。ハリスは約四年間日本に滞在し一八五八年七月二十九日に日米修好通商条約締結に漕ぎつけた。日本最初の「遣米使節」や「遣欧使節」の派遣も、ハリスの奔走によるものであった。

(小坂田 國雄)

■第二回

三月十五日開催、Journal No. 1

ハリスはニューヨーク市の教育局長として、一八四七年に無償の高等教育機関フリーアカデミー(後のニューヨーク市立大学)を設立したことで有名だが、一八四九年後貿易業に転じ六年間アジア各地に留まる間に外交官を志すが、初代駐日総領事の地位を得ようと一時帰国し、首尾良

くピアス大統領の辞令を得て、ヒュースケンを通訳に雇い赴任する部分である。一八五三年上海で日本に行くペリーに同行を断られて三年後のことであった。

(岩崎 洋三)

■人類文明五千年を鳥瞰する

(芳野健二氏)



一月十六日開催、参加十五名。

一、宇宙、地球、人類 人間は自ら知覚できない広大な宇宙やミクロの世界を望遠鏡や顕微鏡などを使って知ることができるようになった。その過程として、二千年前のエラトステネスがアレキサンドリアとアスワン(600キロ)の夏至の太陽の影から、地球が丸いことと約8千キロの円周を持つことを計算したことに私は感動する。

歴史部会報告 担当幹事 小野 博正 mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

猿人、原人、旧人を経て、新人つまり我々ホモサピエンスが数万年前にアフリカに生まれ、一万年前には南米のパダゴニアに到達していたのだ。近年冒険家の関野吉晴が10年かけてそのルートを逆に辿った(グレートジャーニー)ことにまた私は感動する。 二、国家、文明

人類は一万年前に農耕牧畜を知り、5千年前には国家・文明(文字も)をスタートさせた。まずセム系のエジプト(私はカルナック神殿やアブシネルに圧倒された)、ハム系のメソポタミアで、次に西方ではギリシャ(「万物は無限よりなり、万物は原子よりなり、絶えず流転す」、ギリシヤ人の知を私が拙い短歌にした)、ローマ、やがてヨーロッパへ、東方ではインドス文明、黄河文明へ、少し遅れてマヤ・アステカ文明やインカ文明へ(私はまたもチチェンイチュアやマチュピチュに感動した)。 この千年の歴史を鳥瞰すると、国家や英雄の栄枯盛衰はうたかたのごときものであるが、特に20世紀以降には電気、飛行機、原子力、コンピュータなどの発明により今までにない物質的恩恵に浴するとともに、人口の爆発、資源(かつてのローマクラブの警告など)と環境の問題の深刻化に直面している。経済至上主義やミーイズムや利那主義がはびこる今、このことを真剣に考えようとする人は少ないが解決方法には三つある。(松井孝典編「最後の選択」など)。(A)科学技術、(B)政治経済、(C)ライフスタイルの変更、であるが有識者の見解はバラバラである

(このままでは恐竜に笑われる)。私は(○)と考へ、「吾レ唯、足ルヲ知ル」(禪寺の水盤にデザイン的に刻まれている)や「小国寡民」「スモールイズビューティフル」を唱えた老子や石橋湛山、シューマツハなどを今こそ評価すべきではないかと思ふ(人間の業がそれを気づかせてくれるかが問題だが、)。対策についてはまさに今後の各部会の課題であらう。

三、世界のそれぞれの人種とその言語

四、日本人そして日本語の形成

についても議論したが紙面の都合で省略する。

(芳野 健二)

■科学の未来を考える(小野博正氏)

二月二十日開催、参加十七名。

歴史部会の命題「西洋近代の再考」の一環として『科学の未来を考える』をテーマにして、NHK特集「フランケンシュタインの誘惑」科学の「闇」を鑑賞しながら、人間にとって科学とは何か? 科学は人類にとって必要不可欠か? 未来を拓く希望なのか? 又は人類を破滅に導く絶望か? などを議論した。

科学の闇の面、ノーベル賞のキュリー夫妻は発見した

ラジウムの放射能に侵されて死亡。ラジウム時計の生産に関わった女性たちは次々とガンを侵されて死んだ。原爆の父・ロバート・オッペンハイマーは、ドイツが開発する前にと始めた原爆開発を、ドイツが開発してないと分かった後にも、怖さが分かると抑止力になると開発を強行して広島、長崎の投下につながった。さらに窒素固定法でノーベル賞と世界の食糧危機を救ったドイツの化学者・ハーバーは終戦を早め祖国を守る名目で、塩素ガスとマスタードガスを開発して、一瞬にして、数千人を殺傷する毒ガス兵器を作った。その妻は夫に抗議自殺したが、彼は愛国・ナショナリズムに献身した。

科学兵器は常に科学技術と共に進化し、殺戮力を強めてきた。今、日本でも、防衛省の産学研究費投入が問題になっている。臨床医療の進展も人々の延命や長寿に役立っているが、一方でクローン人間や生殖医療などでの倫理問題が発生している。不老不死への挑戦も始まっている。AI問題は、もっと深刻だ。二〇四五年には、人間の脳の働きがそのまま人工知能(AI)に転換でき、不老不死の超人類が出現するシンギュラリティ(技術的特異点)の時代を迎えるとも言われている。

る。

人類の進化や成長に不可欠と言われる科学技術は、果たして人間を最終的に幸せにするのだろうか。現在の先端科学者たちは、一分一秒の先に先駆ける世界的競争時代であり、自分の発明・発見したもの、自分の善か悪かを判断する立場にない、それは政治家や倫理学者の仕事で、好奇心の暴走・科学という一度開けられたパンドラの箱は、もう止めようがない実態を明かにする。専門化・細分化した知の暴走を防げないらしい。とすれば、我々のようなアマチュア集団の方が、より全体知・人類知が働かないかというのが今回の試みである。便利という科学技術への欲望は、止められるのか。こんなスピードで進んで果たして人間はついていけるのか。改めて、一月のテーマ「ヒトとは何だろるか」が問われる議論へと戻った。(小野 博正)

T Cafe @ シェア奥沢

■岩倉使節団の米欧回覧くロシア編Ⅰ(一月二十一日)

第一部映像とお話では、DVD第七章「大國ロシア」を見た後、日比谷図書文化館特別研究室ナビゲーター森田健太郎氏に「幕末の日露交渉く岩倉使節団前史(高田屋嘉兵衛の交渉とロシアの対馬占領)」



ニキータ山下さんのロシアの歌
1月22日(シェア奥沢)

と題して、久米邦武も開國の端緒と認めたレザノフから始まる幕末の日露交渉史を語っていた。第二部ミニ・コンサートでは元『ロイヤルナイツ』バリエーションのニキータ山下に「百万本のバラ」「モスクワ郊外の夕べ」、ソプラノ森美智子さんに「ポールシュカポーレ」、ダンディイフォーに「赤いサラファン」などを植木園子さんのピアノ伴奏でご披露いただき、Cafe Singersもコーラスに参加させていただいた。第三部交流会は、キッチンマスター立山さんお手製のボルシチ、ピロシキもあって大いに盛り上がった。

■岩倉使節団の米欧回覧くフランス編Ⅰ(三月五日)

第一部映像とお話では、DVD第六章「麗都パリとフランスの底力」鑑賞後、東京成徳大学准教授、エミフランス語講座「フアッションをひもとき、時を読む」講師の芳野まいさんに「プルースト(1871)

(1922)の小説とその時代」を語っていただいた。芳野さんは十五歳の時プルーストの名著「失われた時を求めて」(原稿用紙にして約一万枚)に魅せられ、フランス語原文でも読もうと東大を受験され、大学院を経てソルボンヌ大学に留学、プルーストを中心に小説・映画の中の音楽、ダンス、フアッション、ヘアメイクの流行についての研究されている由。ユニークな切り口でのベルエポック時代のお話は興味深々だった。プルーストが名著を手がけた晩年十年間は思考をめぐらし書くこと以外には何もしていない「怠け者」だったとのことや、ルイ十四世が脚線美をアツピールするためハイヒール姿でポーズした絵は国王の権威を発揚する効果をねらったものとのお話意外だった。なお、芳野さんは芳野健二会員のお嬢さんです。(岩崎洋三)



フランス編Ⅱ
3月5日(シェア奥沢)

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 4-25-1-30-102
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL 042-537-8869
- 入会申込**
入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります
<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2017年4月～6月の予定です

☆4月全体例会・講演会

日時：4月20日(木) 10:15～12:00
演題：世界の中の日本の役割
講師：五百旗頭真氏(熊本県立大学理事長)
会場：日比谷図書文化館4階スタジオプラス
会費：会員1,000円、非会員1,500円

☆年次総会

日時：5月24日(水) 13:30～16:30
例会：平成28年度3月期収支決算承認ほか会務事項
討議：グランドシンポジウムを振り返って
会場：日比谷図書文化館4階スタジオプラス
会費：1,000円(17時からの懇親会は別途)

☆実記を読む会

日程：4月28日(金) 小坂田氏「第28、29巻」
5月26日(金)
6月23日(金)
時間：14:00～
会場：国際文化会館401号室(会費：1000円)

☆英書輪読会

日程：5月17日(水) 14:00～
書名：The Complete Journal of Townsend Harris
範囲：Journal 1&2
会場：日比谷図書文化館(会費1,000円)

☆歴史部会

日程：5月15日(月) 13:30～16:30
「西洋近代の普遍性を問う」(吹田尚一氏)
会場：国際文化会館(会費1,000円)

☆グローバルジャパン研究会

日時：5月20日(土) 13:30～16:30
「国際社会からみた日本」(佐野利男氏)
6月17日(土) 13:30～16:30
「最近の国際情勢とその底流」(田中努氏)
会場：国際文化会館(会費1,000円)

☆i-café-music @シェア奥沢 米国編Ⅲ

日時：5月28日(日) 14:00～17:00
「アメリカの岩倉使節団」(マーチン・コルカット氏)
会場：シェア奥沢 03-6421-2118
会費：2,500円(軽食・飲物付き)

編集後記

◇昨年十一月の前号以来五ヶ月ぶりのニュース発行となりました。その理由は、もちろん、恒例の全体例会と新年会の二回分に相当する大きな催事、十二月のグランド・シンポジウムの開催です。今号は通常より四頁増の設立二十周年記念特集号として、八頁を三日間の記録写真による「グランドシンポジウム・フォトドキュメント」で構成しました。

◇写真記録担当の多田直彦幹事撮影の画像を中心に使いましたが、各日ともパネルディスプレイを含み三つのセッションがあり、登壇者も多数で、掲載写真の点数がかなり多くなりました。それでも、スタッフの役割を担った事務局や幹事の方々の映像は少なく、その奮闘ぶりを十分に伝えることができませんでした。映像の裏側には多くの方々の献身在りています。

◇ホームページのリニューアルが、村井智恵さんの手によって工事中です。季刊のニュースでは物理的に困難な速報性ばかりでなく、多くの会員が参加できる舞台が整うことになりました。設立二十周年を機に当会のメディア環境も新しい時代を迎えようとしています。(N)